



シンフォニエッタ静岡



メゾ・ソプラノの鳥木弥生（中央左）

「創立20周年シリーズ②愛と海の詩」という題の公演。指揮は、芸術監督・指揮者の中原朋哉。

前半1曲目は、ポール・ラドミロ

シンフォニエッタ静岡

第80回定期公演

ーの交響詩「ラ・ブリエール」。色彩的で、ケルト民謡の要素も取り入れた、親しみやすい旋律に満ちた音楽。続く前半2曲目は、いつもの共演者、メゾ・ソプラノの鳥木弥生を迎えて、ショーンソンの「愛と海の詩」。オケも歌唱も非常にドラマティックで重厚な音楽を奏でたが、より繊細さとしなやかさが求められても良かったのかもしれない。

休憩を挟んで、後半の1曲目はオネゲル「夏の牧歌」。前半の濃密なロマン性と象徴性の霧がすつと晴れて、より近代的な響きの良さが見事に描かれた印象。後半2曲目はこのオケ得意曲のプーランク／シンフォニエッタ。プーランクの音楽の面白さがたっぷり伝わる演奏。管楽器ソリストの面々も秀逸だし弦楽器も魅力的に演奏した。

アンコールに、ラドミロー「ゲール風狂詩曲」より「スコットランドの歌」。哀愁溢れる旋律で観客を魅了した。（6月20日、三鷹芸術文化センター風のホール）

（倉林 靖）